平成 27 年度の博物館実習 (学内) における企画展示

山内 利秋

平成 27 年度の学内実習

九州保健福祉大学学芸員養成課程での博物館学内実習は平成 27 年度で 5 ヶ年度目を迎えた。今回も実習生による企画展示を主とした学習活動を通じて、博物館学芸員として必要な様々なスキルの習得を目指した。4 年次生前期にあたる授業期間は一般企業への就職を希望する学生はどうしても就職活動に集中せざるを得ないものの、授業時間内かどうかに関わらず、皆自主的に企画へ取り組んでいる姿が印象的であった。

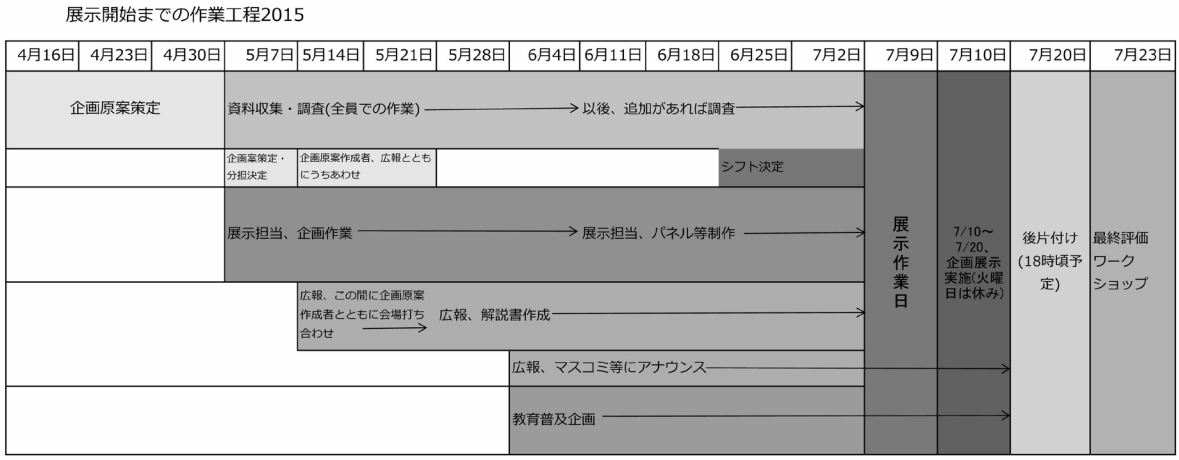

図 1：学内実習における展示企画の作業スケジュール

実習では、問題抽出→テーマ設定→企画立案→展示製作・広報 (途中で中間評価) →展示・教育普及→最終評価を作業サイクルとして進めている (図 1)。期間的には半期 4 ヶ月間弱とあまり長くはないために作業準備には力量を要するが、例年、3 年次生の段階で、実習を希望する受講生には座学だけではない自主的な活動への取り組みを促しており、この段階での学生の参加が 4 年次の段階で企画の良し悪しを左右していると考えられる。

平成 27 年度の実習生は 3 年次に積極的な学習姿勢を有していた事もあり、学内実習の受講を開始する段階でも極めて活発な議論を交わし、それが企画にも反映されていた。しかしながら毎年度同様のモチベーションが保たれている訳ではなく、安定的な学習効果を得るために、実習以前にいかに様々な学習への取り組みを充実させていくかは課題がある。

問題抽出から企画立案、展示制作まで

例年、地域社会の課題解決につながる問題の抽出を取り上げ、そこから企画テーマを導き出すという流れをつくっている。今年度は一昨年度の実習生と同様、環境保全がテーマとなった。実習生達の議論の進展をうかがってみると、大抵大きなテーマを掲げそのまま企画内容としてしまう傾向がある。従ってここから実現可能なレベルにまで実習生自らが納得し、内容を絞り込んでいく作業が必要とな

る。27 年度は、その方法として X 軸・Y 軸に評価軸を設け、アイデアをグラフにプロットしていくという方法を取った。具体的には X 軸には「社会的に価値があるか」、Y 軸には「博物館企画として相応しいか」という評価軸を掲げ、個々のアイデアを配置していく事によって評価を客観化し、その最も高いアイデアをテーマとした。この方法は実習生間でアイデアの客観化が出来たのみならず、例年みられたような個々の学生での内容の理解への差が減少した事を確認した。

また、これによって学生の関与度の開きも少なくなる傾向があった。時期的に就職活動期と重なるために、学生によってはどうしても展示制作等へ参加する時間が短くなってしまう事があるものの、そうした学生であっても自主的に物事を考え、アイデアを持ち寄って自らの役割を果たしていると考えられた。

展示運営と企画の事後評価

『森林 (もり) からのメッセージ〜知ってほしい動物たちの今〜』と題された企画展示は、例年と同様延岡市民協働まちづくりセンターを会場とし、7 月 10 日〜 7 月 20 日の間開催した。この際展示会場において発生する様々な問題 (時には小さなトラブル) をいかに解決していけるかが、実習生にとっては重要となってくる。それは様々な来場者への個別対応や、動線がわかりにくい場合のサインの掲示法、補助パネル・解説シートの追加やキャプションの変更・語句修正、展示資料の破汚損と修理、解説書の印刷製本の追加、そしてワークショップにかかる集客から実施・安全面の確保、さらにはこれら様々な事象をいかにタイムシフトの異なる担当に申し送り出来るか等、幅広い範囲に及んでいる。

こうしてみてくると、学芸員課程における学内実習という一つの授業であっても、その実は実習生が大学生としてこれまで学習してきた様々な授業との関係の上に成り立っている事までもみえてくる。例えば実習生達が自ら展示企画でのシフトを構築していかに効率的に申し送りを行うかについては、その方法を本学科で実施している動物飼育から応用していた。

実習生が自分達を客観的に確認するために企画の事後評価を行っている。これについては負の視点を持たせず、「より以上何が出来るか」というプラスの視点で検討していく方が、次年度以降の後輩達に伝えていくという役割意識が強くなり、結果的に改善点を確認しやすくしている傾向がある。

もちろん、それを次の実習生に明確に伝えていくのは担当教員の役割である。学年によっては、自意識の強さからか先輩達の取り組みを無視したがるケースが出てくる事もあるだろう。無論、そうした場合であっても、彼らが高い学習効果を得るための方略を検討し、実践していく必要があると考えている。

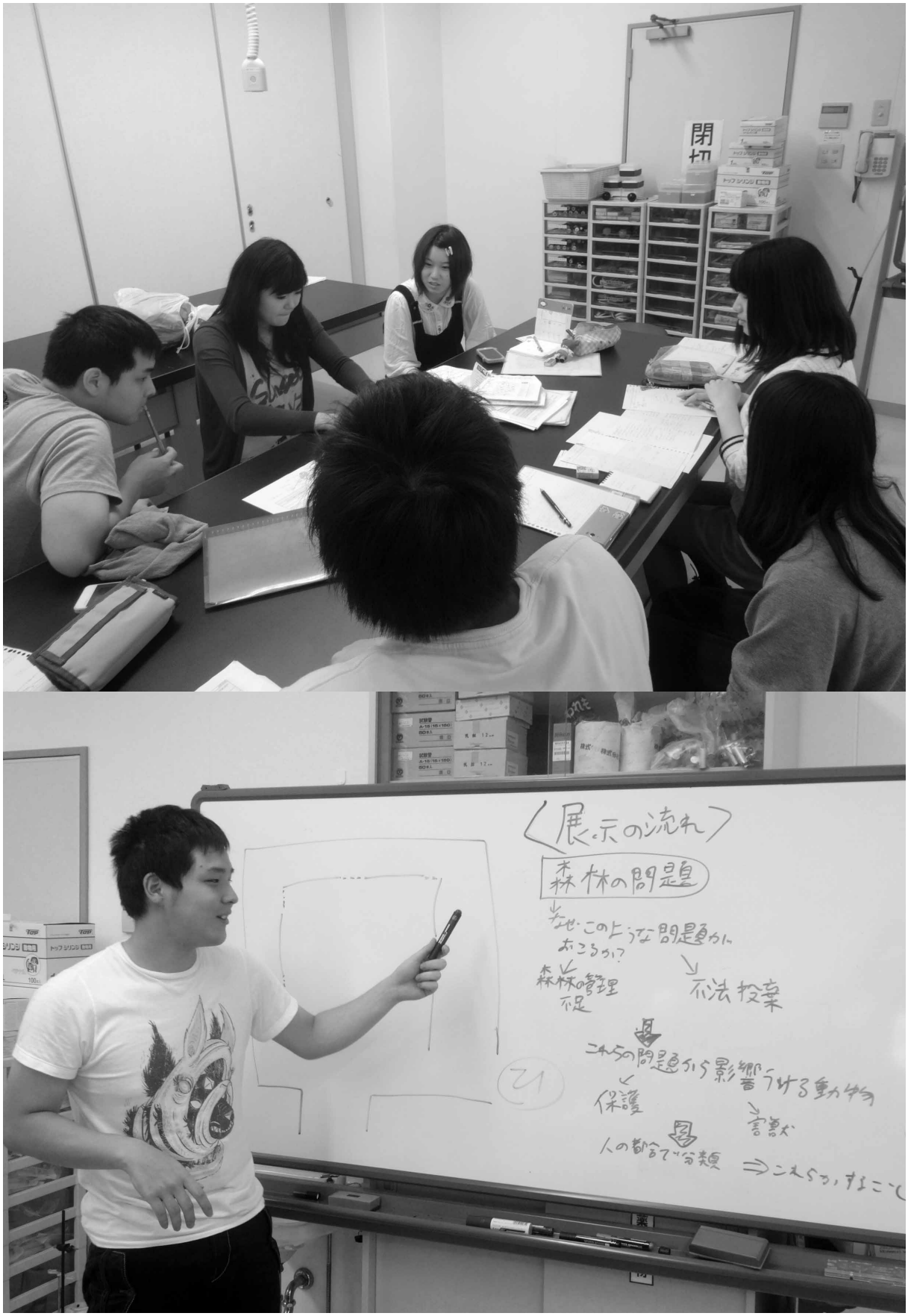

写真 1：地域社会の課題を抽出する

写真２：企画の実現可能性を検討する

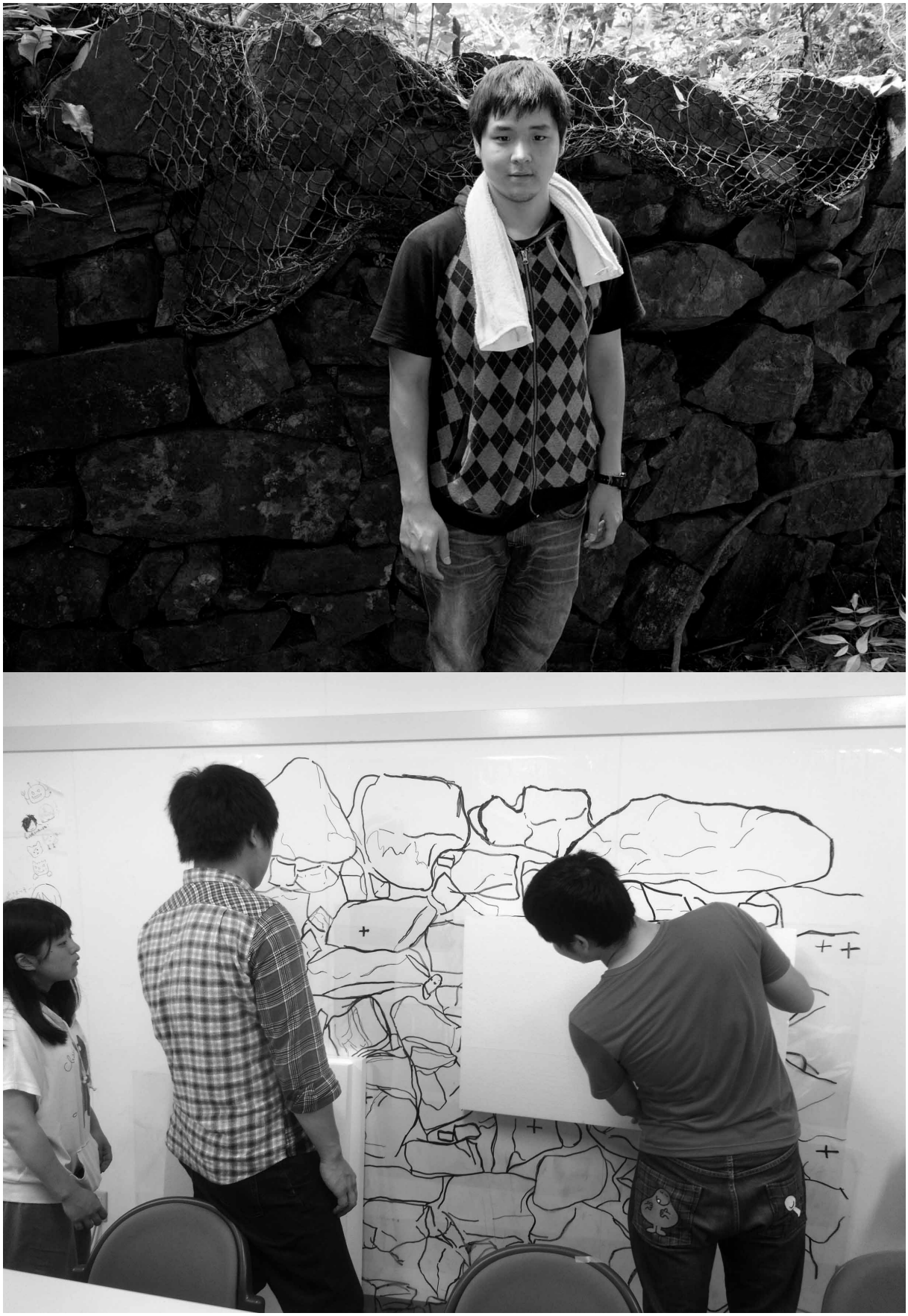

写真３：シシ垣を調査し、模型を作製する

写真 4：完成したシシ垣模型 (スケール 1/1)

写真 5：展示準備中

写真６：展示会場のパノラマ写真

写真 7：展示会場入り口 (上), ワークショップのファシリテーション (下)

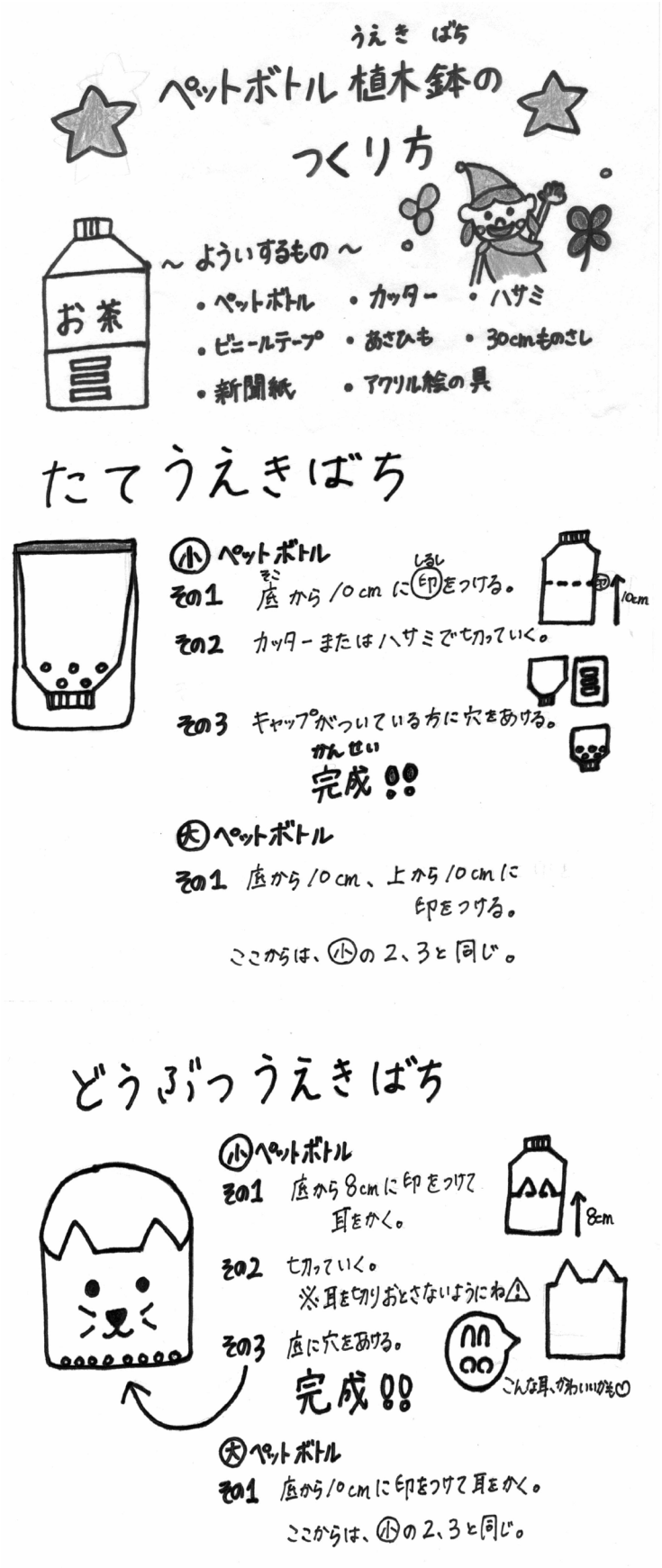

図２：ワークショップでの配布資料 (部分)

何を行えたか
項目の分類
アイディアを出
ことができた。
調査・情報収集が
できた
展示に向けた作業を
すすめることができた。
必要なものを
そろえることができた。
来場者とコミュニケーションを
とることができた。
より以上に何を伝えるか
色画用紙でイノシシやサルの等身大があってもよかった。
足あとだけでなく解説パネルも色に点をつけると良い
立体の木もいくつか作ることができれば良かった
図書館だけでなく、現地の人にインタビューできたら実感がわくと思う。
土地元の人からの情報もたくさん取り入れる。
パネルでの説明をもっと詳しく(専門用語など)
導線
森林からのメッセー
2015.07

写真８：企画の事後評価